



CLUB BULLETIN

R. I. 第 2530 地区

いわき勿来ロータリー・クラブ

会長 遠藤 嘉一
幹事 佐藤 政司
SAA 丹野富二男
会報小委員長 釣巻 穰

○例会日 毎週水曜日 (12:30 ~ 13:30) ○事務所 いわき市植田町中央一丁目 6 番地の 9
○例会場 ホテルミドリ 〒 974 - 8261 ホテルミドリ内
TEL0246 - 62 - 3737

2009 ~ 2010 年国際ロータリーのテーマ

第 2365 回 例会 平成 22 年 6 月 16 日 (水・雨のち晴)

ゲスト

いわき市勿来支所長 小宅 幸一様

ロータリーソング

— 今月は親睦活動月間です —



4 つのテスト
橋本 慶紀 会員

◎会長報告 - 遠藤会長

皆様、こんにちは。いよいよ東南北部も梅雨入りし、うっとうしい日がしばらく続くと思われま。最初に本日のゲストを紹介します。いわき市勿来支所長として 4 月に赴任された小宅幸一様です。後程卓話を頂きます。

報告ですが、会長杯チャリティーゴルフ大会の募金 5 万円をうえだふれあい広場に寄付しました。佐藤防犯協会長と武田サポーター会長へ鈴木エレクトと矢吹親睦委員長、私の 3 人で新聞社立ち会いのものとお渡ししました。

それから残念な話が 2 件あります。1 つ目は釣巻会員が今月末で退会します。理由はロータリーと仕事の両立が難しいとのこと。釣巻会員は出席委員長をやり、現在はクラブ会報委員長です。かつては交換留学生の面倒も見て頂きました。会の活動に大いに寄与して頂いたのですが、残念ながら止むを得ません。今月末にご挨拶があります。2 つ目は最近顔をお見せにならない安齋会員ですが、体調不良で入院されています。しばらくかかるとのことですが、家族からは見舞いを辞退しますと言われていました。

サッカーワールドカップの日本勝利で週初めの日本は熱狂しました。アウェーでの勝利は初めてです。期待が薄かっただけに盛り上がりました。次は 6 月 19 日のオランダ戦ですが大いに期待しています。それと月曜日深夜に小惑星探査機「はやぶさ」が帰還しました。「はやぶさ」は 3 億 km 離れた小惑星「イトカワ」に着陸して岩石を持ち帰る目的で 2003 年 5 月に打ち上げられ、7 年ぶりに帰って来ました。太陽系惑星創世記の謎が小惑星の研究で解けるのではと期待されています。カプセルの中味の分析に半年ほどかかるようですが、楽しみです。私からは以上です。

◎幹事報告 - 佐藤政司幹事

今日の例会を入れて私達の年度も 3 回で終了です。皆様のご協力に感謝申し上げます。皆さんのロッカーを整理しますので中身は全てお持ち帰り下さい。

・東京ヤクルト対横浜戦のチケット案内が届いております。
・6 月 29 日に献血があります。

◎各委員会報告

◆出席委員会 - 越田和副委員長

本日の出席状況は下記の通りです。それから今日は出席奨励賞をお渡しします。金成通之会員、佐久間裕一会員、矢吹明孝会員前の方へどうぞ。おめでとうございます。



◆スマイルボックス委員会 - 鈴木委員

・いわき市勿来支所長小宅幸一様の卓話を歓迎して。川口、富岡、後藤、川中、鈴木、高木、清水、生駒、押田、山下、越田和、金成、渡邊 (公)、渡辺 (勉)、橋本、神白、高萩、横木、佐藤 (次) 各会員及び遠藤会長、鈴木 (修) 会長エレクト、赤津副会長
・出席奨励賞ありがとうございました。

矢吹、金成、佐久間、小林各会員
・「はやぶさ」お帰りなさい。長い旅路の完成燃焼感激しました。川口、富岡、鈴木各会員
・ワールドカップ待望の 1 勝を祝して。川口、富岡各会員
・前回例会欠席ごめんなさい。

吉野、荒川、佐久間各会員及び赤津副会長 猪俣会員

◆新世代委員会 - 清水小委員長

ロータリーは 6 月が年度末ですが、学校は 4 月からすでに新年度が始まっています。磐城農業高校インターアクトクラブも目標部員 20 名にしておりましたが、現在は 25 名で活動しています。



来年はインターアクトクラブ創立 40 周年に当ります。ロータリークラブも 50 周年を迎え皆様のご協力を宜しくお願い致します。6 月 24 日にはいわき総合高校がホスト校になり県内のリーダー研修会が平の文化センターで行われますし、年次大会は白河で 8 月 3、4 日の予定です。

◎ゲスト卓話

いわき市勿来支所長



小宅 幸一様

4 月 1 日から勿来支所に参りました小宅です。今日は「勿来」の由来について「勿来」の地名はどうして生まれ、有名になったのか話をしたいと思います。

1 菊多関

- ①『常陸風土記』(和銅 6 年・713 年に完成)によれば、日雉 4 年 (653) に多珂国造の「くに」が多珂評 (評は大宝元年・701 年に「郡」へ) と石城評に分割⇒菊多関が設置された指定されるが、当時は現在の関とされる位置より北方か?
- ②7 世紀後期 (658 年) ~ 8 世紀前期 (718 年) の関に多珂評 (郡) を 2 分して北部を菊多評 (郡) ⇒ここで初めて、菊多郡は国境として機能
- ③『続日本紀』によれば、養老 2 年 (718) に石城郡と石背国が陸奥国から分離、このとき、常陸国菊多郡の部分が石城国へ移行
- ④神亀元年 (724) 頃、ふたたび石城と石背の両国が陸奥国へ併合⇒菊多郡は陸奥国へ
- ⑤最も古い文献に、この地方に関連する地名が登場するのは延暦 18 年 (799) のことで、『弘仁格抄』のなかに『菊多割』⇒太政官符 (上級官庁から下級官庁に出される公文書) に、白河・菊多に合わせて 60 人の割守 (防備施設のある通行取り締まりの場所の番人) が配置と記録
- ⑥石城国と石背国が再び陸奥国に併合された頃、蝦夷との戦いは東北中部から北部へ。菊多関の戦時色が薄くなり、人民や物資の移動をチェックする場所へ
- ⑦貞観 8 年 (866) に鹿島神社か都へ訴え⇒陸奥国で物の怪がやまないのが鹿島神社の宮司が奉弊 (神に奉る) 物を送り届けるため関を通ろうとしたが、先例がないとして拒否⇒宮司は怒って帰国したが、その後、疫病が流行したので許可してほしいという内容⇒この事件が大きく流布され王朝文学を刺激⇒身近な題材の枕言葉として創作意欲を掻きたて、「勿来」(くるなかれ) という一般的な言い回しが、この地域を言い表したのものとして流布
- ⑧9 世紀後半以降、記録物に登場しなくなった「菊多関」⇒役目を終え、廃止されたものと推定

2 「なこそ」の発祥

- ①いわき地方で最初に「奈古會関」の文字が登場するのは、寛文 10 年 (1670) 葛山為篤によって編纂された、いわき地方最初の地誌『磐城風土記』←磐城平藩主三代・内藤義概 (風虎) の命令
- ②最初に場所を特定したのは、磐城平藩主二代目・内藤忠興、承応年間 (1652・55)、海岸を見渡せることのできる一帯に桜の木を植えた場所
- ③幕末、大須賀筠軒著『磐城史料稿本』の「奈古會関址考」のなかには「鍋田三善翁云フ、後人勿来ノ字ヲ用フルハ誤リナリ」とある。江戸時代末期には「勿来」「奈古會」の両方が表記
- ④以後、文学に詠われる場所として知られていく過程「奈古會」は「勿来」と表記
- ⑤現在は「勿来関」「勿来の関」の両方が使われてい

るが、古代からの表記は「勿来関」。「勿来関文学歴史館」に「の」が表記されないのは、この理由
⑥「勿来の関荘」は観光施設のため、命名の際に問題とならなかった。しかし、「勿来関文学歴史館」の場合、歴史的要素が濃い施設であるため、命名の際に歴史研究者から異論が出て、現施設名へ
3 関の名が地域名に成った背景

- ①後の関本村と窪田村は江戸時代の宝永 7 年 (1710) から村境をめぐる紛争。これを「山論」と呼称⇒関の延長上にある稜線を村境 (峰通り) とするか (窪田村が不利)、稜線の下の沢に続く田んぼの畦を村境 (沢通り) とする (窪田村が有利)、訴訟⇒国境でもあるため、幕府が直接裁定
 - ②幕府は検地帳の記載事項などを重視し、窪田村の主張を受け入れ⇒現在もこの部分の県境は稜線下の沢通りとなっていて、曲がりくねった形態へ
 - ③このように、両地区は昔から競争し合う関係
 - ④明治 27 年 (1894)、関田地区民が発起人となり、磐城、磐前、菊多三郡と茨城県多賀郡に寄付を呼びかけ、関を改修⇒関認識の主導権を掌握
 - ⑤明治 30 年 (1897) 2 月に開通した日本鉄道磐城線 (現常磐線) の駅名をめぐる、関の場所とされる地域と等間隔の距離に位置する関田と茨城県関本の地区民が、駅名「勿来」を引っ張り合いした説
 - ⑥関田地区民の運動が功を奏して、関田側が「勿来」、茨城県側が「関本」(現大津港) へ
 - ⑦鉄道が開通してしばらくは、旅行者が関跡に行く場合、関本駅に降りて、平湯に宿泊するのが一般的。関跡を訪れた長塚節や徳富蘆花などの文学者はこのコースをたどり日記に記述 (勿来駅から関跡に行く道は末整備)
 - ⑧大正 13 年 (1924) 昭和天皇の御成婚を記念して関跡にマツを植栽。住民によるまちづくりが醸成
 - ⑨大正 14 年 (1925) 4 月、地区民は勿来関顕彰碑を建立。併せて、窪田村と平湯村の青年が桜を植栽し、関跡に至る道路を改修
 - ⑩大正 14 年 (1925) 5 月、窪田村は勿来町へ町制。『勿来』が地名として定着する第一歩
- 4 「勿来」の名が定着し、まちづくりや観光の拠点へ
- ①昭和 9 年 (1934)、関の存在を全国に広めようと、勿来町青年団が舞踏史劇「勿来の関」(劇作家・岡本綺堂作、大正 4 年初演の「なこそ関」が基を披露。NHK ラジオで放送されて注目⇒平成 5 年 (1993) に「勿来ふるさと振興協議会」が主体となって史劇「勿来の関」を再演
 - ②昭和 13 年 (1938)、勿来町も主体として加わり、松川磯海水浴場 (後の勿来海水浴場) と結び、遊覧地として P R 開始
 - ③昭和 26 年 (1951)、勿来関跡と称される一帯や勿来海岸が「勿来県立自然公園」に指定
 - ④昭和 30 年 (1955)、勿来・錦・植田の 3 街と川部・山田の 2 村が合併し、知名度のある「勿来市」へ
 - ⑤関跡の実態解明とは別に、多くの文人墨客が歌詠みする舞台として、着々と実績を積み重ね
 - ⑥昭和 35 年 (1960)、松川磯海水浴場を勿来海水浴場へ改称
 - ⑦昭和 63 年 (1988)、「勿来関文学歴史館」が竣工⇒まちづくりの拠点の一つとして位置づけ
 - ⑧平成 19 年 (2007)、「吹風殿」が竣工。新たな拠点施設が誕生
 - ⑨こうして、「勿来関」は永年にわたる多くの地域住民の活動や行政の支援により、風光明媚な借景を活かした名所として認知

出席状況

正会員数 56 名
本日の出席率 75.51%

修正出席率 81.63%